

## 投稿

松岡 慶 ● MATSUOKA, Kei  
豊橋市民病院 麻酔科

## 小児麻酔の工夫を、成人患者にも

## 「人」をみる麻酔科医を目指して

1年前、手術当日の朝。これから手術を受ける3歳の女の子が、手術センターの受付で待っていた私を見つけると、パツと駆け寄ってきて「はいっ!」と折り紙で作ったハートを渡してくれました。前日の麻酔の説明がきちんと伝わり、安心してくれたのかなと思うととても嬉しい気持ちになりました。でも、もっと嬉しかったのは、この様子をそばで見ていた高齢の患者さんのひとことでした。「こんな小さな子が自分の足で歩いてきたのね。あー、私も手術、がんばらなきゃ」

## できるのにやらないのは、カッコ悪い

8年前の赴任当時。手術室に向かうことも多く泣いていました。保護者も子どもに対して何もできず、手術室に子どもを残して退室するだけでした。私たち手術センターのスタッフも、それを「仕方のないこと」と受け止めていたように思います。

でも、本当に「仕方のないこと」なのでしょうか。子どもや保護者が、少しでも安心して手術に臨めるようにできることがあるのではないかな。

「できないなら仕方がない。でも、できるのにやらないのは、カッコ悪い」

そう感じたことが、私の取り組みの原点でした。

## 「できること」から始めたプレペレーション

当院では年間約250件の小児麻酔を実施しています。小児科病棟があり院内保育士もいますが、チャイルドライフスペシャリストはいません。限られた資源の中で「自分たちにできること」をスタッフと協力をしながら、少しずつ試してきました。

麻酔のしおりを作成し外来で配布。宝箱やパペットを使った麻酔の説明。風車を使った息を吐く練習。保護者同伴によ

る麻酔導入。どれも手探りでしたが、改善を重ね医療に向き合うことの力を引き出せるようになりました。

そして4年前。小児科病棟と協力して「ケロちゃんツアー」と名付けた手術センター見学ツアーを始めました。手術前日のツアーにより、手術センターが「初めて行く場所」から「行ったことがある場所」に変わります。受付で好きなシールとフェイスマスクを受け取り、マスクに絵やシールで装飾し「Myマスク(写真1)」に。愛着が湧くのか、手術当日も自分からマスクを顔に当ててくれます。現在はツアーにシールラリーを加え、緊張しながらも自分の足で手術台にあがれることも増えました。

手術室へ向う廊下や手術台にぬいぐるみを配置し、手術室の扉をウォールステッカーで装飾して、手術センターの雰囲気も変わりました。こうした取り組みで何よりも変わったのは、子どもは泣いても「仕方のないこと」と受け止めていたスタッフの意識でした。今では子どもが入室時に泣いていても、泣いている子どもと保護者を温かく迎える姿勢がスタッフにあります。「泣かなかったこと」を成果にするのではなく、「泣いても自分で乗り越えられた」という感覚を子どもがもてるように、スタッフはサポートをしています。

## 大人だって手術はこわい

こうした小児麻酔の取り組みを続けるなかで、ふと気づいたことがありました。

「大人だって、手術はこわいよな」と。手術室を日常にしている麻酔科医はつい忘れてしまいがちですが、私たちの日常は患者さんにとって非日常です。そこで私は、大人に対しても心に寄り添う麻酔を意識するようになりました。こどもでの成功体験を取り入れてみたのです。

例えば、手術前日に「退院後の楽しみは何かありますか?」とさりげなく尋ね

## ▼写真2 ホスピタル・クラウン



ます。その話題を麻酔導入の直前にそっそと患者さんにお話しします。患者さんの意識を目の前の恐怖から少し先の未来へ向けるのです。すると、緊張していた患者さんの表情が穏やかになります。また患者さんが希望する音楽を手術室に流すだけで、表情がふっと和らぐこともあります。音楽の力で手術室を患者さんの空間に変えるのです。

手術に対する不安が強い患者さんには、家族に依頼をして患者さんに宛てた手紙を書いていただきました。大人では家族同伴による麻酔導入は行いませんが、手術室で渡す手紙により家族の存在を伝えることができます。

また、術前訪問では病室のカーテン越しにパペットを使って「こんにちは!」と挨拶をします。意表を突かれて大人でもほとんどの方が笑います。大人だって、何歳だって、こわいし、緊張するし、笑いたい。笑いとお互いの距離を縮めてくれます。

このような活動にスタッフを巻き込みながら、こどもだけではなく大人も含めた周術期の接遇改善を目指しています。

## ホスピタルクラウンの活動から得た学び

私はホスピタルクラウンとしても活動しています(写真2)。この経験から学ん

だのは、「共感とユーモアには、場の空気を変える力がある」ということです。

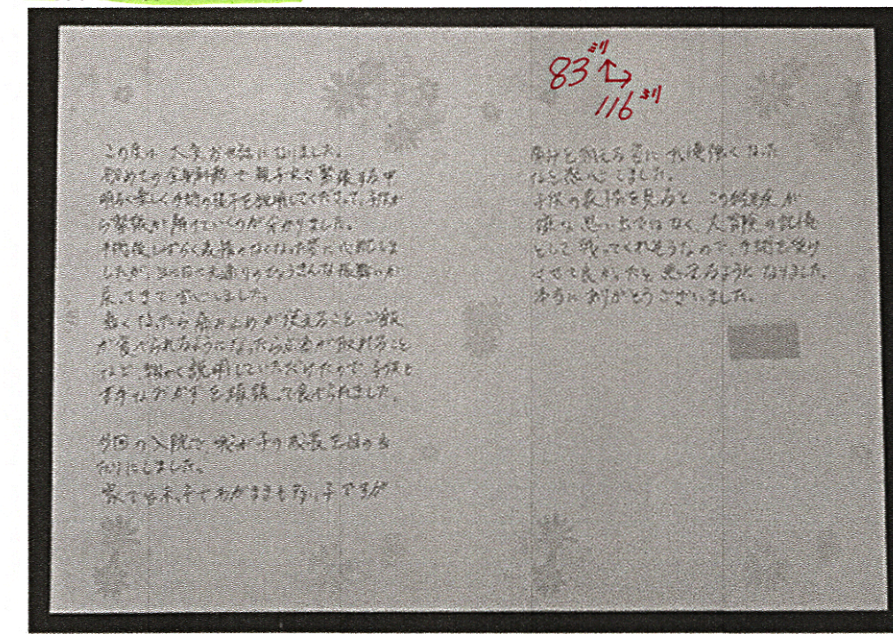
医療者がすこし肩の力を抜いてかかわることで、患者さんの緊張も和らぎます。相手に関心を寄せ、不安な気持ちにそっと手を差し伸べる。優しさを押し付けるのではなく、目の前の患者さんが、「その人らしさ」を取り戻せるようにそばにいる。この距離感が安心と信頼の土台になるのだと思います。

## 「心に届いていた」と実感できる手紙

退院前、患者さんや家族に手術について感想をお伺いしています。「次の患者さんのために力を貸していただけませんか?」とお伝えすると、ほとんどの方が書いてくださいます(写真3)。

その手紙には、私たちが手術室で交わしたささいな一言や、音楽、パペットの登場が、患者さんの心に届いていたことが綴られています。手紙を通じてスタッフと喜びを分かち合い、問題点を共有しチーム医療の土壌を育てていくのです。

## ▼写真3 患者さんからの手紙



麻酔科医が一人の患者さんとかかわる時間は短いかもしれません。でも私たちは、患者さんの人生のなかで最も不安な瞬間に立ち合います。患者さんが家族にも言えない本音を漏らしたときに、私たちに何ができるのでしょうか?

全身管理のプロフェッショナルである私たちが、心にも目を向けてはじめて、「人」をみるができると思うのです。どうか、手術室で患者さんをひとりぼっちにしないでください。無関心が人を傷つけます。手術の傷跡は多くの人が気にかけてくれますが、心に負った傷は目には見えません。近づいて、そっと優しく声をかけてください。

確かな技術で生きる希望をつなぐこと。そして、優しく患者さんの背中を支えること。

それが私たち手術室スタッフの役割です。特別な設備や高額な予算がなくても、こどもに寄り添う医療は提供できます。そして、こどもへの取り組みをきっかけに、大人の患者さんにも思いやりのある医療を届けていく。それが私たちの目標です。